【地医教第3号①様式】地域包括ケアシステム推進事業等(4-(12)-①関係)

事業実績報告書　　2025.5.27

実施年月日	2023年9月26日　2024年1月29/30日・2月1日・3月27日・5月29日・事業延長届を提出し、8月26日・9月9日
助成事業等の実施内容	１．e-learning教材に代わり、地域協働ケアナース養成事業の一環として看護学生教育用「地域包括ケアシステムにおける視聴覚教材」作成を実施中 1）中間報告以降、8月26日夕張市にて追加撮影の実施 ①夕張市立診療所、介護医療院、訪問看護風景 ②診療所院長、介護医療院所長、訪問看護師にインタビュー実施 ③地域包括ケアシステムについてDVD冒頭部分導入の言葉を前沢先生に依頼し撮影 ２．「看護学生の地域に対するイメージと地域指向性に関する研究」 1）2023年9月26日　本学保健看護学科1年60名に1回目データ収集2回目2024年7月20日データ収集済　2024年9月に次学年にもデータ収集している。只今、分析中。
助成事業等の実施成果	１，DVD教材はまだ完成に行きついていないが、作成に至る過程の取り組みについて資料にまとめた。旭川市立大学保健福祉学部研究紀要第2巻に掲載した（別添資料参照）。DVD教材完成後は、講義内でも大いに活用したい。 ２．「看護学生の地域に対するイメージと地域指向性に関する研究」は現在データ分析中。結果は各種研究会、（北海道プライマリケア学会・北海道公衆衛生学会など）にて発表したい。 ３．2024年度本学卒業生が夕張市に就職、保健師として着任した。今後も卒業生等と連携を取りながら地域の実情を学び、地域協働ナース育成に励みたい。

地域包括ケアシステムの教育における視聴覚教材作成の取り組み

Development of Audiovisual Educational Materials for Teaching Community-based Integrated Care Systems

工藤さつき　羽原美奈子

Satsuki KUDOU and Minako HABARA

2025 年 3 月

旭川市立大学保健福祉学部研究紀要，第 2 巻，67 ～ 69 頁別冊

資　料

地域包括ケアシステムの教育における視聴覚教材作成の取り組み

Development of Audiovisual Educational Materials for Teaching Community-based Integrated Care Systems

工藤さつき　羽原美奈子

Satsuki KUDOU and Minako HABARA

旭川市立大学保健福祉学部保健看護学科

Ⅰ．はじめに

現在，少子高齢化や人口減少の加速により介護需要の急増という課題に対し，厚生労働省では地域包括ケアシステムを推進している。政府は重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう，住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築をすることが重要であるとし，看護職の養成においても地域看護関連の学習が強化された。本大学では2022年度入学生より新たに「地域看護論」「地域包括ケアシステム論」「地域と協働論」などの科目を開講した。

厚生労働省は，地域包括ケアシステムは，保険者である市町村や都道府県が，地域の自主性や主体性に基づき，地域の特性に応じて作り上げていくことが必要であるとしている[1)]。このことから，地域包括ケアシステムは地域の特性に応じて構築されていくため，実際のまちを例に学ぶことが効果的であると考える。辻は，視聴覚メディア教材のメリットとして①学習者の印象に残る学習資料を提示できる，②講義だけでは伝えにくい現実的な場面を提示できる，③対面授業と効果的に組み合わせることにより相乗的な学習効果が期待できる，の3点を挙げている[2)]。これらのメリットから，教授方法として実在するまちを対象にDVD教材を作成し活用することにした。“実在するまち”の対象地域として，高齢化，人口減少率が全国1位である北海道夕張市を映像化することとした。高齢化や人口減少が進行する中で，いかに夕張の人々が工夫して生活されているか，関連職種がどのように人々の生活を支えているのかといったまちの現実と体制を学ぶことができると考えたためである。更にこの教材が，現場に即したイメージと実情を学んだ，地域で働く看護職（地域協働ケアナース）[註]　養成に貢献するものと考える。

以上のことから，地域包括ケアシステムの教育において視聴覚教材の作成に取り組んだ内容を報告する。

Ⅱ．視聴覚教材作成の内容

1．目的

講義（科目：「地域看護論」「地域包括ケアシステム論」等）の中で「地域包括ケアシステム」について教授するにあたり，現状や体制，住民の生活の実際などを知り，学生の理解や考えを促す効果的な方法として実際のまちを例に視聴覚教材を作成し活用する。

2．方法

対象自治体を夕張市とし，保健・福祉・医療の実際の活動風景とインタビューの様子を撮影し，DVD教材を作成する。撮影・編集協力は有限会社ライフクリエイティブリサーチに依頼。打ち合わせ：(夕張) 2024年1月29日，30日，(札幌) 2月1日，9月6日　撮影およびインタビュー：(夕張) 3月27日，5月29日，8月26日

3．インタビュー対象者

元夕張市立診療所長（現涌谷町町民医療福祉センター長・北海道大学名誉教授），現夕張市立診療所長，訪問看護師，介護医療院院長，市役所保健師，市役所

受付日：2024年12月27日

職員，社会福祉協議会職員，住民（サロン参加の高齢者，介護予防教室参加者）

4．撮影場所

夕張市立診療所，介護医療院，夕張市役所，夕張市社会福祉協議会　他

5．内容（構成）

タイトル「これからの地域包括ケアとは（仮）」

Chapter1

・地域包括ケアとは～これからの地域包括ケアはどうあるべきか

Chapter2

・夕張市の紹介と現状

Chapter3

夕張市の医療

・夕張市の医療の現状・課題
・夕張市立診療所，介護医療院
・訪問看護
・地域連携会議

Chapter4

夕張市の行政

・夕張市の保健師活動
・地域包括支援センターの活動
・介護予防教室の様子
・デマンド交通
・住民主体のサロン活動
・サロン活動の様子

Ⅲ．視聴覚教材作成の取り組みからの考察

教材作成の目的から内容構成を検討し，インタビュー項目を作成し関係職種や住民へインタビューを実施した。また，住民が参加している介護予防教室や地域で行われている住民主体のサロン活動の様子を撮影することができた。

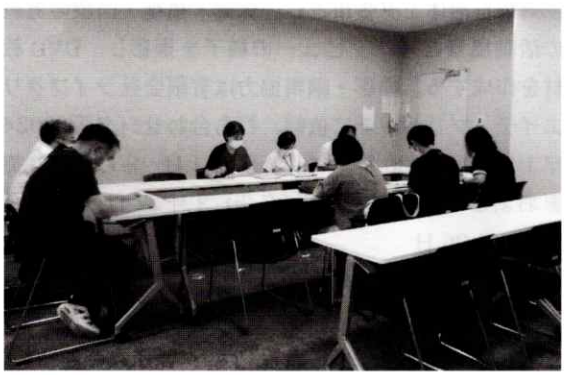

写真１　地域連携会議の様子

夕張市は炭鉱を中心に発展したが，閉山により急激に人口が減少し高齢化率が上がっている。高齢になると足腰が弱くなり通院困難な患者さんが多く，それに対して訪問診療や送迎に力を入れていた。また，夕張市立診療所では総合診療科があり，専門医療だけでは解決できない問題に対して，医療だけではなく介護・保健・福祉も視野に一人一人その人全体を見ることができる総合診療のニーズが高い。地域では，医療と介護等との連携や生活に密着した医療の提供が必要であると考えられる。

住民主体のサロン活動では，いつも通りの隔週水曜の集まりで自分や家族のこと，近況を話し合い，参加者で協力して昼食を作り食事を囲みながら談笑されていた。また，住民の一人が中心となって頭の体操などを実施していた。

かつて夕張市が炭鉱で栄えていた頃からすでにこのような活動が始まっており，このサロンの地区も炭鉱で働いていた人が住んでいた地域であり，閉山後もこの地域に残っている人たちであった。炭鉱では「一山一家」という言葉があり，従業員全体が家族のような精神もあり，昔からのつながりによる絆が強いと感じられた。一人暮らしの人も多く近くに商店もないため，このサロンがないと家から出る機会がないと話し，外出の機会にもなっていた。交通が不便のため市で行っているデマンド交通を利用して通院したり，近所のつき合いから野菜などの食材をもらったり，足りないものは貸し借りするなど助け合って生活していた。長年住み慣れた地域での生活を継続したいと考えていることがわかった。都会では失われつつある，住民同士の昔ながらのつながりやおつきあい，支え合いといったものが，ここにはまだ色濃く残っており人と人とのつきあいの豊かさを感じることができた。これらのことから，地域包括ケアシステムにおける互助の必要性や役割は大きいと考える。

そして，社会福祉協議会では，職員がサロンに参加して，参加者の困りごとを聞き市や医療機関等と連携しながら，孤立しない居場所づくりを行っている。このように，サロンの継続のための支援が大切になることを学ぶことができた。

市が希望者を募って実施している介護予防教室では，市内各地域から多くの高齢者が集まり体操を実施していた。

参加者の中には，近くのパークゴルフ場がなくなり運動できる場がなくなってしまうことを契機に参加し

写真２　介護予防教室の様子

た人や，体操して体が軽くなった，体調がよい等の効果を実感していることを述べる人たちがいた。介護予防教室は，運動の機会となり健康管理につながっていた。また，参加者は何年も継続して参加している者が多い様子で，参加者同士会える楽しみもあると話され，人とのつながり，交流の機会にもなっていた。

自身の健康は自身で守る，そして，人々の「つながり」を大切にすることは，どこに暮らしていても，有益な地域包括ケアシステムの鍵，要因のひとつとなるのではないかと考えられる。

また，インタビューを通して，地域包括ケアシステムはあくまで手段であって，目的は一人ひとりがその人らしい生き方ができるということであり，その人のネットワークを大事にして皆で補い合っていくことが大切であるということがわかった。地域包括ケアシステムにおいて看護職は，高齢者の思い・生き方を聴き，それを大事にする姿勢を持つことが大切である。そして，多職種と話し合うことで気づきや学び，共通理解を促し互いに助け合うことがよりよいサービスの提供につながると考えられる。

Ⅳ．作成した視聴覚教材の今後の教育への活用

本学で実施している地域看護関連の科目の中で，作成したDVD教材を効果的に活用したい。そのため，科目内容を精選し何をどこまで教授するか，DVDを活用して現場の状況，職員や住民の生の声を聞いて学習するかを検討する必要がある。

中井らは，映像教材は学生にとって刺激的な教材になりえるが，授業の学習目標に沿って適切に使用しなければ効果は高まらないと述べている[3]。また，野崎らは，映像を使う場合は見せる目的を明確にするべきであると述べている[4]。１年次の地域看護論では，地域包括ケアシステムの概要を導入として伝え，２年次の地域包括ケアシステム論へとつなぐなど学びの順序性やその科目での目的や目標を明らかにし，それに合った映像を活用することが必要であると考える。そして，学生にはその映像を見せる目的を明確に伝えることで，学習効果を高める必要がある。

今後の活用に向けて更に詳細な内容の検討を行い，効果的な活用に向けて準備を進めていく必要がある。

Ⅴ．おわりに

今回，実際に教材を作成するために夕張市へ赴き，そこで活動している職員からのインタビュー，住民活動の様子や住民からのインタビューより，職員や住民の思いを知ることができ，既存の資料からは得ることができない視聴覚教材を作成することができた。

この貴重な教材を，学生にとって効果的な学びとなるよう，活用方法について十分に検討し，地域に貢献できる看護職を養成していきたい。

謝　辞

今回の視聴覚教材の作成にご理解ご協力をいただきました，夕張市立診療所，介護医療院，訪問看護ステーション，夕張市役所，夕張市社会福祉協議会の職員の皆様，夕張市民の皆様に心から感謝申し上げます。

視聴覚教材作成は，一般社団法人地域医療教育研究所「地域包括ケアシステム推進基金（地域協働ケアナース養成事業）」助成によって遂行されている。

引用文献

1）厚生労働省：地域包括ケアシステム，https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/index.html（2024.12.10 閲覧）
2）辻義人：視聴覚メディア教材を用いた教育活動の展望－教材の運営・管理と著作権－，小樽商科大学人文研究，115，175-194，2008
3）中井俊樹，小林忠資：看護教育実践シリーズ３授業方法の基礎，95，医学書院，2017
4）野崎真奈美，水戸優子，渡辺かづみ：計画・実施・評価を循環させる授業設計－看護教育における講義・演習・実習のつくり方，85，医学書院，2016
註）地域医療教育研究所（代表理事：前沢政治氏）では，地域多職種協働に強いナースを“地域協働ケアナース”と命名し，その育成事業を実施している。